本校中学部における書き言葉の指導について

―自立活動、特別活動等における指導を中心に―

廣瀬　由美

聴覚特別支援学校中学部で国語科としての指導以外に行われている書き言葉の指導について先行研究をいくつか取り上げ、本校中学部の言語指導の特徴や内容、小学部までとの相違点等についてまとめた。それを元に筆者自身の実践をいくつか取り上げて振り返り、今後の課題として、よりよく書けるようになるために必要なものごとの捉え方、認識の仕方、日本語での表現方法をきちんと結びつけていけるような指導の工夫を認識した。

キー・ワード：中学部　作文　弁論大会　読書感想文　自立活動　特別活動　個別指導

1　はじめに

聴覚特別支援学校における言語指導を「書き」の側面から見ると、幼稚部では絵日記、小学部では日記や作文の指導の実践等、数多く報告があり、研究会や研修会等のテーマになることも多い。当然、中学部でも「書き」の指導は継続されているが、幼稚部、小学部と比べるとその報告数は格段に少なく、国語科以外での指導についてのものはあまり報告がない。

そこで本稿では、中学部生徒を対象とした実践について、先行研究や本校中学部の国語科以外で行われている言語指導の特徴や内容、小学部までとの相違点を書き言葉に焦点を当ててまとめ、自身が学級担任や部活動顧問等として行ってきた実践を振り返り、今後の指導の課題を明らかにしていきたい。

2　中学部生の「書き」指導についての先行研究

聴覚特別支援学校中学部における書き言葉の指導についての先行研究を全日本聾教育研究大会の発表や『聴覚障害』誌の記事の中から探し、まとめる。

(1)　全日本聾教育研究大会の発表より

平成 27(2015)年までの発表題目一覧について、分科会名や発表題目についてキー・ワード検索をかけ、分類した。題目のみでどの学部の実践か分からないものもあったが、予想通り、幼稚部・小学部の実践報告がほとんどで、中学部生のみに焦点をあてたものは国語科の実践を除くとあまり見受けられなかった。

その中で、安藤(1997)や藤尾(2010)等中学部生の作文指導についての発表があったが、収録を入手して内容を詳しく読むことができなかった。

(2)　『聴覚障害』誌より

『聴覚障害』誌については 2015 年秋号で「ことば・国語教育」の特集を組んでいる。その中から中学部・高等部の生徒の国語科以外での言語指導について概要をまとめ、紹介する。

まず、黒川（2015）は、個人新聞づくりを通した使えることばを増やすための寄宿舎における生活支援の実践について述べている。

次に、大野（2015）は、修学旅行を題材とした行事中の指導と行事後の指導の工夫について述べている。

また、全国聾学校作文コンクールの作文の分析についても何度か記事となっている。全国聾学校作文コンクール調査研究委員会（2015）は、応募作品に関し、題名や書き出しが工夫され、主題の書き方についての指導が徹底していると述べている。また、表現・言葉の面については、同一段落で同じ言葉を多用していること、2 つの事柄を対比させようとしているものの適切な対比になっていない場合があることや心情の表現の仕方が端的過ぎたり、説明的だったりするものが見られることが課題とされている。

久米（2017）は、学校生活に関することと自分の

ことに関する作品の２種類に集中し、視野の狭さや生活の単調さをうかがわせること、中学生らしい内容の深まりやスケールの広がりも見られる作品がある中で、時系列に事実を羅列していくことから抜け出せていない作品も多々あったことが課題として述べられ、日常的に感性を磨く日記指導について具体的な実践を紹介している。

久米（2019）でも、題材に偏りが見られること、主題意識が十分ではなく、後半からまとめにかけて主題から離れてしまったり、説得力を欠いてしまったりしている作品が見られることが課題として指摘されている。また、作文指導は表現技術の指導ではなく、ものごとの捉え方、認識の仕方、日本語での表現方法をきちんと結びつけていかなければ「書く力」をつけることはできないと述べられている。

3　中学部における言語指導の特徴

まず、本校中学部での言語指導の特徴について、小学部までとの相違点に注目してまとめておく。

(1)　教育課程・教科担任制

中学部では放課後、部活動を行っているので、小学部とは異なり、通常、放課後の個別指導は行われていない。

担任が日記等を個別の課題として課すことはあるが、他教科の宿題等があると、時間をかけて取り組めない場合がある。週末や長期休業中等時期を限定する等工夫が必要になる場合もある。

中学部では教科担任制となっているので、担任が国語科の担当ではない場合、小学部と比べ直接的な言語指導をする機会が少なくなりがちである。「聾学校教員は国語の教師たれ」と言われる一方で、「各教科の学習が言語指導に終始してはいけない」とも言われる。教科学習の時間は教科学習の時間として確保することも大切であるのは言うまでもないが、職員室等で各教科の用語のつまずき等については情報を共有し、複数の教員で指導していくことも必要である。

(2)　発達段階・心理的な側面

日記指導については、思春期に当たる中学生の場合、家庭でのできごとや自分の気持ち等を日記に記して、指導を受けることが心理的に難しい場合がある。そのような状況で表現意欲が高まらない場合には内容が深まりにくい。

社会的なできごとについてまとめ、それについての感想や意見を述べる朝学習の取り組みや文化祭や宿泊行事等の前後に行われる調べ学習は、そういった心理的な影響を受けにくい活動でもある。

4　中学部で行われている言語指導の内容

(1)　作文

①　行事・抱負（目標）作文

林間学校、修学旅行等の宿泊行事、体育祭、文化祭等の全校行事の後には担任の指導のもと、作文を書いている。初めから宿題として課して添削指導のみで仕上げる場合や、最初は自立活動や特活等の時間で書き始め、続きを宿題として課して添削指導のみで仕上げる場合、ある程度まで宿題・添削で書き進めてから、自立活動等の時間で直接やり取りをしながら指導していく場合があるが、その多くは添削、修正後、教室に掲示されている。

一年、年度、学期等の始まりには抱負や目標を述べる作文を書いたり、箇条書きの掲示物を作成したりする。

こうしたものは「鮮度が命」という部分もあるので、あまり大幅な直しはせず、できるだけ早く仕上げ、掲示して、同じ行事に対して他の生徒が取り上げた内容や表現をお互いに見られるようにすることが多い。

②　読書感想文等コンクール応募作品

本校中学部では夏休みの必須課題として読書感想文を課しており、中学部教員による校内審査があり、出品する作品については国語科教員または担任が指導し、清書して応募している。その他、自由課題として、全国聾学校作文コンクール、「私の思い」～中学生の主張～、心の輪を広げる体験作文、税についての作文等に出品する作品を希望者が書き、提出しており、国語科教員または担任が指導し、清書して応募している。

③　弁論大会の原稿

本校中学部では年２回、12 月と３月に生徒会行

事委員会が弁論大会を開催している。各年度 12 月は 2、3 年生のみ、3 月は全学級から 1〜2 名、合計 7〜8 名が、一人 3〜5 分の持ち時間で自らが決めたテーマで発表を行う。

その発表の原稿については、各学級の担任が 1 ヶ月ほど前から指導に当たり、準備を行い、終了後は原稿を冊子にして生徒全員に配付している。

生徒自身が話したいテーマで作文を書いてくることがほとんどなので表現意欲にあふれており、1 回あたり 1〜2 名を指導することとなるので、じっくりと取り組めることが多い。原稿が仕上がってからは、できるだけ正面を見て話せるように原稿を読む練習を繰り返し行い、聞き手のことを考え、写真や文字カード等の視覚的な補助についても考え、工夫して発表の練習を行っている。

④　生徒会誌『旧兵舎』の原稿

本校では、中学部、高等部普通科、専攻科の生徒会で、年度末に生徒会誌『旧兵舎』を発行している。各生徒は A5 サイズ 1 ページ(2 段組)の文章を書き、それを国語科教員または担任の指導を受け、パソコンで入力し、出稿している。全員が原稿を書くが、原稿用紙配付から提出締め切りまで比較的、時間があるので、時間をかけてじっくり指導することができる。

⑤　『志望の動機』の原稿づくり

本校高等部普通科の入学試験では『志望の動機』の作文を出願時に提出している。担任の指導の下、時間をかけて書き上げている。面接試験の準備の材料としても用いられ、中学部 3 年間で生徒自身が読み返す回数が最も多い作文ともいえる。

(2)　総合的な学習の時間

総合的な学習の時間では、行事の事前事後学習に関連したものや各学年で設定したテーマに関する調べ学習等が行われている。

①　宿泊行事のしおりやまとめの展示物

中学部では毎年 5 月に 1、2 年生が林間学校、3 年生が修学旅行に参加している。2、3 年生は事前学習として行先について調べ、まとめる学習を行っておいる。事後学習として行事で学んだことを係や活動班に分かれて、全員で協力してまとめている。

②　文化祭の展示物

毎年 10 月下旬から 11 月上旬に行われる文化祭では各学年でテーマを決め、調べたことを文章や図、表、グラフ等にまとめ、教室展示を行っている。体育館で劇を行う際は多くの場合、生徒が中心となって脚本を作っていくので、その指導も担任が行っている。

③　国際交流に関する掲示物等

1 年生はソウル聾学校とのスカイプ交流を年 2 回行っている。国際交流に向け、事前に伝えたいことや尋ねたいことを文章でまとめ、可能な部分は英文に直している。また、2 年生は自分たちの経験を 1 年生に伝える学習も行っている。

④　職場体験のまとめ

2 年生は職場体験学習を行っている。職業についての調べ学習や職場でのマナー等の学習を行い、実際の体験に出向く。事後学習としてお礼状を書いたり、学習発表会に向けて発表資料の準備を行ったりしている。

⑤　卒業に向けた活動

3 年生は進路が決まり卒業が近付くと、卒業に向け、卒業アルバムの制作と卒業を祝う会の準備を行う。卒業アルバムの見出しやコメント、祝う会の招待状、式次第、余興等、言葉に関する指導が合わせて行われている。

(3)　手紙文

自立活動の時間等を活用して、各学年で近況報告、お礼状、招待状等手紙文の学習を行っている。

(4)　学級日誌・漢字検定準備・朝学習

学級日誌における言語指導も大切なことである。作文等と比べると話し言葉の許容範囲も広くなるが、気軽に書きやすい点や生徒同士で回覧しながら書いていく点をうまく生かしながら、生徒の表現力を高めたい。

漢字検定は希望者が受検することにしているが、個別課題や進路指導等と関係づけながら、取得に向けて計画を立てて、指導に当たっている教員も多い。短文とはいえ、文の中では正しく漢字を使っていくためには語彙力や文法力の向上も必要とされる。学習したノートの添削等、個々の生徒の力や性格等に

応じて、指導を行っている。

また、朝学習等で漢字や計算のドリル学習ではなく、新聞記事の要旨をまとめたり、それについての自分の考えをまとめたりする学習を行っている学年もあり、社会的なできごとに関心をもたせ、視野を広げるためにも有効な活動である。

(5)　その他

委員会活動や部活動等に関連し、文化祭での展示、朝礼での報告・連絡、部活動日誌、歓迎会、送別会、部活動の主将による生徒会誌『旧兵舎』の原稿等言語指導する機会がある。教科学習で担当しない生徒に対する指導が難しい場合もあるが、担任や教科担当者とも協力しながら指導に当たっている。

また、話し言葉の指導が中心にはなるが、職員室を訪ねてきた生徒への指導も欠かせない。傘を忘れたため貸出用の傘を借りる、朝、預けた貴重品を受け取る等の用事で来室した生徒に対し、適切な表現ができるように指導を行っている。

5　中学生段階の書き言葉の課題

約 20 年間本校中学部で生徒の作文等を見てきて、課題であると感じている点についてまとめておく。

(1)　助詞や活用の誤り、主述のねじれ

小学部の児童に比べると、中学部の生徒の助詞や活用の誤りや主述のねじれは少なくなっているものの、全く指導の必要がないというわけではない。

聾教育全般でいわれるように、受け身、やりもらい、使役等は文法的な誤りが多く見られるので、折に触れて訂正し、反復練習し、正しく使えるように指導していきたい。

また、話し言葉をそのまま、作文等でも使ってしまうことがある。例えば、「なので」等文頭で使うことで適さない接続詞を文頭で使う、「…してる」等音便の変化が書き言葉として適切ではない場合があるので、会話文の中では認めるが、地の文では修正を促している。

(2)　語彙

中学生になるとある程度の表出語彙があるので、それなりに内容を把握できる文章を書いてくるが、分からない語を調べて書くという手間を省いて、知っている語彙だけでなんとなく伝わるように書く生徒も多い。また、全国聾学校作文コンクール調査研究委員会（2015）で指摘されているように、同じ言葉の多用も見られる。

生徒が持っている語彙を氷山に例えるとすれば、水面より上に見えている使用語彙の下にはそれよりもはるかに多い理解語彙があるので、理解語彙を増やすと同時に、より分かりやすく正しく伝わるように、それまでに身につけてきた理解語彙を引き出し、表現に使用できるように助言して、必要に応じて反復練習を行い、使用語彙に引き上げることが中学部の段階では必要とされる。

中には、理解語彙を積極的に表現に用いようとする意欲の現れでもあるのだが、語彙の意味理解がやや不正確なため、文脈に沿わない語を使っている場合もあるので、具体的な例、事実を確認して、適切な表現に直していくことも必要である。

また、語彙の面でも、話し言葉をそのまま、作文等でも使ってしまうことがある。例えば、「ググる(インターネットで検索する)」「告る(告白する)」等の若者言葉や、「林間に行く(林間学校に行く)」等の省略、「あいつら」等やや乱暴な言葉等、書き言葉として適切ではない場合があるので、会話文の中では認めるが、地の文では修正を促す、学級日誌では許容するが掲示する作文では修正を促す等文章のタイプに合わせた語彙・表現を用いることができるように指摘・助言するよう心掛けている。

(3)　情報の正確さ

作文等には、事実関係、例えば、試合の流れ、状況、勝敗、歴史的事実、統計的数値、法律や制度の用語等正確に記述しなければならない事項がある。

弁論大会や生徒会誌『旧兵舎』や各種作文コンクール応募作品では社会問題や国際情勢等をテーマにする生徒も多いが、固有名詞や事実関係が曖昧だったり不正確だったりすることも多いので、教員による確認、訂正が必要である。

(4)　全体の構成

中学生ともなると、時間の制約もあって、構成メモを全く作らずに書き始めてしまう場合もある。中学生の場合、簡単なテーマであればメモを作らなく

てもそれなりに書くことができるが、テーマによっては全体構成が不十分となり、まとまりのない文章になる場合がある。例えば、同じ時に起きたできごとがかなり離れたところに書かれており、後から詳しい説明が出てきて、読み進めていくと混乱してしまうものや疑問を投げかけたのに他のことを書いているうちに答えにたどり着かないまま終わっているもの等がある。そのような場合は、生徒自身が読み返しても気付きにくいので、教員の方から問題点を指摘し、順番を入れ替えさせたり、疑問を投げかけて足りない部分を加筆させたりする必要がある。

(5)　説明の冗長さや説明不足

全国聾学校作文コンクール調査研究委員会（2015）で同じ言葉の多用が指摘されているが、語彙力の問題だけではなく、構成面の工夫で防げるものもあるので、冗長になる原因を見極め、修正を図っていきたい。

中には指定された文字数を満たそうとするものの他の内容が思い浮かばず、苦し紛れに繰り返している場合もあるので、新しい視点を持たせるために「〇〇についてはどう思う？」、「なぜそうなったの？」等、質問を投げかけ、その答えを述べさせることで十分な分量を確保し、不要な繰り返しを省くことができる場合もある。

6　自身の実践の振り返り

本校中学部生徒の課題として感じてきた点について、自分自身がどのように取り組んできたのか、学級担任として行った 3 つの指導例を取り上げて、振り返り、まとめておきたい。

(1)　読書感想文『新しい自分に生まれ変わるために』

この作品はある男子生徒が『さよなら、スパイダーマン』という物語を読んで書いた感想文であった。最初、提出された段階では原稿用紙 3 枚ほどとコンクールに出品するにはやや短い感想文であった。

文章の文法的な誤りや不適切な語彙もなく、あらすじだけではなく、それぞれの場面についての感想等も分かりやすく書かれ、よくまとまっていたが、作品全体に対する感想が 3 行程度にとどまり、量だけではなく内容としても無難には仕上がってるがやや物足りないという印象を受けた。

物足りなさの正体を探すために何度か読み返すと、前半部分でタイトルの「スパイダーマン」という言葉から受けた印象が裏切られた驚きが書かれていたが、なぜ「スパイダーマン」という言葉がタイトルに入っているのかは感想文を最後まで読んでも分からないことに気付き、「なぜタイトルに『スパイダーマン』という言葉が使われているのか？」という疑問を投げかけて、加筆を促した。その結果、テロにより家族が失われ、残された家族もバラバラになってしまう中で、テロ以前の幸せの象徴としてすがっていた「スパイダーマンが描かれていたＴシャツ」に別れを告げ、新しい自分に生まれ変わるということを意味しているのではないかという深い読み取りをまとめることができ、分量も約 4 枚半まで増やすことができた。

残念ながら出品したコンクールで受賞することはできなかったが、その後、この生徒が弁論大会でテロをテーマに取り上げたのはこの読書感想文に対する取り組みと無関係ではないと考えている。

(2)　読書感想文『魔法がくれたかけがえのない時間』

この作品は、日頃から使用語彙の不足を課題と感じており、もっとスラスラ話したいと訴えていた男子生徒が『魔法がくれた時間』という物語を読んで書いた感想文であった。感想が豊かに語られ、着眼点にユニークな点もあり、興味深い感想文ではあったが、使用語彙の不足や文法的な誤り等により理解しにくい点があったので、誤りを訂正したり、より適切な表現を提示したり、より正確に詳細に述べるために質問を投げかけたりしていきながら文章を直していった。例えば、「過去に進む」という表現は「さかのぼる、逆戻りする」等の表現を提示して選ばせたり、生徒自身が使ってみたいと思った「若人」という語彙について、使っても違和感のない文と「若者、若い人」とした方がよい文を区別したりした。

そして、前半部分に書かれた読み初めに抱いた「魔法がどのような時間をくれたのか」という疑問に対

する答えとなる内容が後半部分に書かれてはいたが、その疑問に対する答えだとはっきりと分かる書き方になっていなかったので、加筆を提案した。

さらにその内容を「○○な時間」のように一言で表せる言葉は何かと問いかけ、様々な言葉を例として挙げ、「かけがえのない」というそれまで表現に用いたことがない語彙をタイトルに使うことができた。

(3)　弁論大会『人間＝キャンバス』

この作品は一人一人の人間を一枚の絵、一つ一つの性質を色に例え、長所だけの人間もいなければ短所だけの人間もいない、様々な性質(個性)をもったカラフルな存在であり、自分自身の個性を生かし、輝いていきたいといった内容の弁論であった。

この作品を書いた男子生徒は小学部時代に作文のコンクールで受賞したこともある、豊かな表現力をもった生徒である。作文を書くことが好きで、より読み手を引き付ける書き方をしようと創意工夫を欠かさない生徒であった。

最初に書いてきた原稿では、弁論大会の原稿ということで「話す」ということを念頭においていたためか、「いきなり」、「どっち」、「…しないんじゃないかなと思うんです」、「…って」等、弁論としてふさわしいとは思われない話し言葉が混在していた。そのことを指摘し、「突然」、「どちら」、「…しないのではないかと思うのです」、「…とは」等と修正を行った。

内容に関しては、長所を赤、短所を青と例えていたのだが、あまりに単純化され過ぎていて、極端な話の流れになっているように見受けられた。また、タイトルも「人間＝絵の具」となっていて、もう少し別の言い方はないのだろうかと感じた。

色々と考えていく中で、その原因の一つが、彼が思う「絵」が水彩画のイメージであることに気付き、むしろ様々な色を塗り重ねていく油絵の方が塗り重ねていくことで変化していく色合いや仕上がりのイメージが一人一人の複雑さを表すのに合うのではないかと思い、油絵について投げかけ、そこから「キャンバス」という言葉を引き出すことができた。

また、単独の色が持つイメージとは別に他の色と組み合わせた時の役割や効果等についても話し、人間の個性というものは実に複雑な面があることを確認して、全体の文章を整えることができた。

この生徒に対するそれまでの作文指導では、自分の力でそれなりに読み応えのある作品を書いてくる生徒であったためにさらに良くするような指導を行うことが難しいと感じていたが、この作品に関してはじっくりと色々なことを話し合い、内容を深め、表現も磨くことができ、満足感の高い作品となった。

7　おわりに

筆者は英語科教員であるが、英作文の指導を行っていると、小学部までに育まれた日本語で考えて表現する力のありがたさを感じることが多い。特に英検 3 級以上の試験で行われる面接や英作文の指導に際しては、1 つ例題に取り組めば、他の問題でも同様に考えて表現することができる生徒が多く、根底にある言葉の力の意味を痛感している。

同様に高校以降の生活を考えていくと、中学部段階にふさわしい日本語の表現力を身につけていくことは生徒達の様々な学習活動に影響していくと考えられる。

今回、自分自身の実践を振り返るにあたり、いくつかの先行研究について知ることができたが、全日聾研集録のものについては、詳しい内容を確認することができなかったので、今後、入手して参考にしていきたい。

また、久米(2019)が指摘しているように、「書く力」を身に付けていくには、ものごとの捉え方、認識の仕方、日本語での表現方法をきちんと結びつけていくことが必要である。そして、そのような指導を行っていくには、教員自身が様々なことに関心をもち、多様な人々の考え方に触れ、多面的にものごとを捉えていくこと、豊かな語彙をもち、言葉を正しく用いていく姿勢を忘れてはならない。日々の多忙さに負けず、自分自身の感性を磨きながら、指導方法や内容を工夫していきたい。

〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫

理審査委員会の承認を得ている。

〔参考文献〕

安藤妙子（1997）聾学校中学部生徒の作文に対する教師の評価及び指導に関する調査研究.平成9(1997)年第31回全日本聾教育研究会京都大会研究収録.

藤尾ひとみ（2010）中学部における作文指導の取り組み.平成22(2010)年第43回全日本聾教育研究会札幌大会研究収録.

久米武郎（2017）聴覚障害教育における作文指導のために　中学部として力を入れたい作文指導　―第 12 回全国聾学校作文コンクール応募作品の分析から―.聴覚障害,72(夏),26-41.

久米武郎（2019）聴覚障害教育における作文指導のために(Ⅱ)　中学部，高等部における作文指導―第 14 回全国聾学校作文コンクール応募作品の分析から―.聴覚障害,74(秋),28-41.

黒川由美（2015）使えることばを増やすための生活支援―個人新聞づくりの実践を通して―.聴覚障害,70(秋),52-57

大野佳代子（2015）生徒が黄金色に輝くとき　修学旅行の作文を書く―行事中の指導と行事後の指導の工夫―.聴覚障害,70(秋),58-64

全国聾学校作文コンクール調査研究委員会（2015）聴覚障害教育における作文指導のために～第 10 回(平成 26 年度)全国聾学校作文コンクール応募作品の分析から～. 聴覚障害,70(夏),58-70.